交流と対話を通した学内の連携を考える
ー「異文化交流の体験から何を学ぶのか」と「日本事情Ⅳ」の連携ー

大橋 眞
OHASHI, Makoto
徳島大学大学院ｿｼｵ･ｱｰﾂ・ｱﾝﾄﾞ・ｻｲｴﾝｽ研究部

Gehrtz 三隅 友子
GEHRTZ-MISUMI Tomoko
徳島大学国際センター

要旨：2011 年後期より現在（2012 年後期）まで徳島大学共通教育にて開講している「日本事情Ⅳ」と「異文化交流の体験から何を学ぶのか」の二つの授業を教師の連携によって実施した。留学生と日本人学生（社会人も含む）の協同学習（Peer learning）を実施するにあたって、互いの目的とその達成を確認しながら授業デザインを振り返り、この取り組みとその意義を確認することが可能となった。言い換えれば両者の協同学習を進めるための教師の協働を評価する試みである。教師の連携による授業の実施には、従来とは違った方法や内容の工夫等が、またそれぞれの学習者に対する目標の確認とそれらが達成されたかの検証が必要となった。この授業に関わった学生らの評価と教師の評価をもとに、今大学において必要とされる教育とは何か、そしてそれを具現化する内容とその方法を考えたものである。同時に FD 活動として、教師の協働に対する示唆も行いたい。（本稿では 2011 年後期の実施内容を分析及び考察する。）

キーワード：異文化交流・対話・日本事情・協同学習（ピア・ラーニング）・評価

1. はじめに

日本語教育の現場においては、複数の教師が一つのクラスを担当し日本語学習を進めるというティームティーチングの形態はごくあたりまえに行われている。徳島大学においても国際センターが実施する日本語クラスは、研修コース（大学院入学前の予備教育：初級）においては週５日の授業を一人のコーディネーターを中心に３人の教師による連携で、また全学日本語コース（旧日本語補講コース：初級から中級）は週２日を２人の教師（そのうち１人が主担当となる）による連携で実施している。

いずれも到達目標があり、各々がその日に目指す教育項目（学習項目：シラバス）も設定されていて、日本語教師はその目標のもとに各授業を行う。すなわち与えられた持ち場を確実にこなすことによって、また互いに補完し合うことによって授業の目標、教育のねらいに歩み寄る形式で実施するのである。一方、共通教育で開講される「日本語 1-8」及び「日本事情Ⅰ-Ⅳ」（いずれも上級）は１週間に１日１回 90 分といういわゆる大学での他の語学あるいは教養科目の授業と同じ形で行われる。

また日本人学生対象の授業も、一つの講義の中でテーマに沿って複数の教師がオムニバスに授業を行うものや、演習と理論で複数の教師が、内容を分担して行う授業もあるだろう。

今回の取り組みは、1-2 年生対象の教養科目「異文化交流の体験から何も学ぶのか」と、留学生対象の「日本事情Ⅳ」といった一見して目標が異なる授業を連携して行うことにより、互いの目標を達成し、かつさらに別々に行うこと以上の効果を上げることができないかという教師側の問いかけから始まった。この問いかけを互いに確認し、また実際に授業を行う中での授業前後の話し合いからさらに多くの気づきが得られた。

以下、実践の経緯、内容、学生らそして教師の評価、また実践から得られた知見を通して今後の課題を述べる。さらに、このような授業の意義を考えるとともに、実践に必要とされるものは何かを考察する。

2. 授業の連携

2.1. 経緯

徳島大学全学共通教育では、平成 20 年度より地域社会人が参加して、「学生・地域社会人・教員」が学びのコミュニティという学習グループを作り、課題を巡って議論をする形式の授業を展開してきた。この取り組み「地域社会人を活用した教養教育」は、平成 20 年度文部科学省の質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）に採択されている。この中で、ゲストとして外国人研究者や留学生の参加する場を設定する機会を設けてきたが、毎回ゲストに対する学生の反応が良いために、次第にその枠を広げてきた。また、スカイプを使って外国の大学（中国・青島理工大学、韓国慶北大学）との交流も行ってきた。さらに大学教育を考えるインターナショナル・カンファレンスを開催して、

異文化交流による学びの意義についての意見交換を重ねてきた。これらを進める中で、人と人を結ぶネットワークが広がりを見せるようになり、授業の中で、異文化交流に基づいた協同学習を取り入れる基盤が形成されてきた。課外活動においても、「吉野川プロジェクト」「国際交流みちくさキャンプ」等で、日本人学生と留学生とが交流する中で、新しく成果をあげることと、次の企画を立てることが比較的容易にできるようになってきていた。

2011年前期に留学生対象の「日本事情Ⅲ（前期開講）」では、日本人学生2名が単位取得を目的としないボランティアとして参加する試みを行った。この授業において日本人学生は留学生とグループをつくり、様々なテーマに関して議論をする中で、留学生は「日本人への提言」を構想するためのヒントを提供する役割を果たすことができた。また、日本人学生も留学生と議論をする中で、異文化交流から学ぶことの意義を感じ取るようになり、2名の学生はいずれも短期留学を希望するようになった。また、他の留学生との交流に、積極的に参加するようになった。このようにして、授業における異文化交流の成果は、単に授業の範囲で終わるのではなく、様々な形で学生の学びに対するモチベーションの高揚に繋がっていることが推測された。この日本人学生が留学生向きの授業にボランティアとして参加することは、日本人学生にとって留学生と知り合う好機となった。結果として、日本人学生と留学生の双方に学びに対するモチベーションの高揚といった良い効果が得られたが、日本人学生にとっては単位にならない授業であったために、継続性に対する課題が存在することとなった。また、留学生にとっても、留学生対象の授業においては、出会う日本人学生の数が極めて限定されるという問題がある。

このような問題点を解消するために、2011年後期においては、「異文化交流の体験から何を学ぶのか」（日本人学生対象の教養科目：大橋担当）「日本事情Ⅳ」（留学生対象の教養科目：三隅担当）が、個別のオリエンテーション後に、同じ教室で合流し、それ以後は2つの授業を合同で行う形式で実施した。

2.2. 活動

2011年後期は、「異文化交流の体験から何を学ぶのか」（以下「異文化」と記述）は日本人学生13名及び社会人2名が、「日本事情Ⅳ」は留学生5名（韓国1名・マレーシア1名・中国3名）の登録及び参加があった。こうして教師2名と受講者20名で開始した。

さらに毎回の活動の流れは回によっては違いはあったが、おおよそ表1のような流れであった。

表1 ＜毎回の活動＞

授業の流れ(90分)

1 前回の振り返り（ひとこと感想の確認）
2 グループ作り（留学生を核として）
3 タスク(課題)・ゲストの話等
4 話し合い・意見交換
5 発表
6 振り返り（個人とグループと全体で）

毎回の最後（表1の6の振り返り）に作成した「ひとこと感想」20名分を1枚の紙にしたものを見ながら振り返る。そこでは前回の自分の取り組みはどうであったか、改善点はあるのか等を考えた後、新たなメンバーを作って今回の活動に向かうことを促した。また日本人学生には、毎回の感想をメールで担当教員に送ることが義務付けられた。　そして、全体の活動は表2である。

表2 ＜全体の活動＞

1） 自己紹介書の作成及び配布
2） 学内外の様々な異文化活動の紹介
3） 学内外からのゲスト
4） 担当講師の出張報告
5） グループ活動(意見交換・発表)
6） 振り返り(個人・全体)

開講当初には、全員の自己紹介書（A4サイズの用紙に写真とメッセージを書いたもの）を作成し、全員に配布し、顔と名前を確認することを行った。その後詳述する様々な活動を行った（資料1:2011年後期実施内容を参照のこと）。

2.3. 「異文化交流の体験から何を学ぶのか」

現代社会ではグローバル化が進行し，様々な価値観や文化的背景をもった人間同士の交流の必要性がとみに高まってきている。このような状況の中で、異文化交流の意義を理解して，相手方の文化に興味を持つとともに，自身の文化的背景についての理解を深めておくことが重要となってきていると言えよう。そのために，留学生との交流や，遠隔ビデオ会議による海外

の大学生との交流を通じて，実際に異文化交流を体験しながら，異文化交流に必要な視点を探り，自身の文化的背景を学ぶことを目指す。このような経験をすることにより、グローバル社会の課題や，異文化についての考えを深め，多様な視点で物事を考えて、自身の視点で様々な形で表現する力や対話力を身につける。さらに、「異文化交流」をテーマとして，同世代の文化的背景が異なる学生が「交流」するということの意味を考える。すなわち、この授業のテーマ「何を学ぶのか」を自身の視点で捉えることを目指す。

表3「異文化交流の体験から何を学ぶのか」

- 目的:異文化交流の意義を理解する。
- 到達目標:
  1)交流による互いの文化背景の理解
  2)コミュニケーション力の育成
  3)価値観の違いを確認することから！
- キーワード:
  ・英会話力 ・異文化交流 ・体験学習
  ・国際化 ・地域社会人 ・遠隔ビデオ会議

2.4. 日本事情Ⅳ

前期に「日本事情Ⅲ」後期に「日本事情Ⅳ」の名称で実施している。留学生を対象として日本語能力の向上を図りつつ、より日本文化や日本人に関する情報を得ること、また情報を得る方法を獲得することが目的である。そして最終的に日本でよりよい留学生活をおくれるように、かつ各々の目的達成を支援するための授業である。これまでにはNHKの番組「視点・論点」の中から随時ピックアップしたものを主教材として使用してきた。これは国際社会問題、事件等を専門家が8分間で解説し、また専門家が提言をするというものである。このインプット型の授業とともに、高校を訪問しての交流活動や美術館での日本人との活動も加えている。

最終課題としては「日本人への提言」原稿を作成し、それを日本人の聴衆の前でスピーチとして発表する。様々な人から評価を得ることも行っている。2011年後期は、前期をふまえ、前期から継続しての受講者1名と10月来日の4名の5名に対して、最終課題「日本人への提言」作成と発表の場を確保することを目標としていた。また日本人学生との協同によってこの課題作成のための情報収集や日本語に関する相談等のやりとりができることを期待していた。

表4「日本事情Ⅳ」

- 目的:総合日本語力の育成(日本文化理解)
- 到達目標:
  1)ミニ講義の理解;「NHK視点論点」
  2)テーマに関連した文献理解
  3)自分の意見をまとめ、発表する力の育成
- キーワード:
  ・メディア ・ニュース ・講義を聴く
  ・提言を書く ・プレゼンテーション

3. 協同による活動

資料1の2011年の実施内容に記載している。

3.1. 協同による活動（工夫と効果）

相手から何を学ぶのかということ自体を、主体的な態度で自から問いかけることができるかが、その相手に興味を持って学びの幅と質を高めていくと考えられる。主体的に学ぶことの意義が理解できていれば、授業の度に考えるポイントを指示されなくても、自然と毎回のテーマの中から、自身の中に問いかけのサイクルが動き出すのだろう。ここでは今回の連携によってよりよく実施できたと思われる4回の活動を例としてとりあげ、その活動でのねらいと工夫さらに授業後の受講者からの「ひとこと感想」やコメントを入れながら概説する。

3.1.1. 「あいさつ」を考える

「あいさつ」をテーマとして取り上げることにより、その地域の伝統文化の持っている人間関係の位置づけのようなものが、時代をさかのぼって見えてくるようで、興味深い。日本語の「あいさつ」の表現を留学生と共に意味を考えながら、他国のものと比較することにより、日本文化の持っている特色が理解できる可能性がある。特に別れの「あいさつ」は、他の「あいさつ」よりも、その文化を共有する社会における人間関係のあり方を表しやすい。このような気づきを起こすためには、留学生と共に学ぶことが有効であることを明らかにする目的で、このようなテーマを取り上げた。また、このことをきっかけとして、普段は気が付かない日常的な当り前さを考え直すことにつながれば、学びの幅が飛躍的に広がることが期待されよう。

参加学生の一人からは「今回の授業では挨拶について話し合うものでした。私たちが何気に使っている『おはよう』や『こんにちは』、『さ

ようなら』にはよく考えると難しいものでした。グループで日本においての『おはよう』は相手を尊敬する意が込められており、外国ではただ単純にいい朝ですねや元気ですかなど状況や相手の状態を尋ねるものだということを発見しました。中国の挨拶と比較しながら話し合えたのは面白い発見がありよかったです。挨拶の面から異文化を体験するのも新鮮でした。このような身近にあるものから他の文化と比較してみたいと興味の沸く授業でした。」というコメント（記述のまま）が得られた。このように普段気にしていないことを、留学生の外国語という視点から考えてみる、立場を変えて考える場となったと言える。

3.1.2. 「南太平洋の国から何を学ぶのか」

「南太平洋の国から学ぶ」では、自然とともに生きる人々の暮らしを知ってもらうことで、人工物に囲まれて生活することが当たり前になってしまった自分自身の存在に対する気づきを期待した。さらに、文明という言葉が持っている本質について考える機会を設けることを目指した。史上最大の海戦の舞台となり、紅に染まった海を臨む海岸も、今は訪れる人もなくひっそりと静まり返った砂浜や、山のような旧日本兵の死体を村人が埋めたあとに植えたとされる巨樹などは、学生の心にどのような感覚を呼び起こすのかという点も確認したい点であった。置き去りにされた旧日本兵の残した文化が現地の子供に引き継がれている事実などは、一部の学生には心に残ったようである。

このように日本の歴史の教科書には、まったく記されることのない大きな事件があるということに対する気づきにつながれば、留学生と共に学ぶことにより、様々な方向に学びが広がるために大きな意義があると考えた。

しかし、学生の反応を見る限りにおいては、今回の内容を理解するにはあまりに隔たりが大きい。学校において歴史の教科書に基づいて行われる授業の範囲で、このような事実の存在を考える基盤ができていると期待するのは、かなり無理があるようである。人名や事件などの固有名詞を年代とともに記憶することを強要される歴史の勉強の中では、その時代を生きてきた一般社会の人々のことを想像することは難しい。また、留学生と共にこの時代の歴史を考えることは意義深いが、難しい問題が数多く存在することが想定される。この点に関しては、「地域社会人を活用した教養教育」において、日韓中の教員と学生・地域社会人が時間をかけて議論をした。その結果、地域社会の人のつながりという観点からものを見ていくことにより、同じ立場にたって近代国家というものを見つめなおすことが可能となり、同じテーブルで共に学ぶことが出来るという理論付けが出来た。しかしその前提となっているのが、地域における人と人とのつながりであり、その関係が希薄になっているとすれば、作成した理論のように進めるのは困難であるかもしれない。

この活動に対しての学生の一人コメント（記述のまま）を以下に記す。「12 月 22 日はソロモン諸島とバヌアツの話だった。この話から学んだことは、『人間は本来自然の中で生きるもの』ということだった。学校や家は縄文時代のたて穴式住居のような外観、また川に面している家もあった。さらに、空港がバス停ほどの小ささで、滑走路が草むらであり、普段は子供たちの遊び場であるということに驚いた。また、この島の近くに太平洋戦争のときに日本軍が上陸・撤退した場所があるということ、さらにそれを弔ったりもしたことから、日本とも深い関係がある場所だということがわかった。これまで自分は、日本で人生を過ごしてきたから、海外の国の生活はよく分からない（分かっていたとしても、テレビや本ぐらいでしかない）。でも、今回の話で日本にはあっても他の国にはなかったり、また他の国にはあっても日本にはなかったりするものがあり、『人間は本来自然の中で生きるもの』もその一つなのかもしれないということを感じた。」

3.1.3. 「SSV プログラムの留学生を迎えての特別授業」

SSV プログラムで短期間徳島大学を訪れた、タイ、アメリカ、モンゴルの学生６名をゲストに迎えたこの活動は、コミュニケーションの手段としての言語について考え直してもらうきっかけにすることを目指した。テーマを決めて、自分の伝えたいことを英語で表現することや、英語で相手が伝えたいことを自分で理解できるかなど、コミュニケーションの成立する要素を考え直すことが、この回の授業の大きな目的である。また、主体のはっきりしない表現を好む日本語表現と、主体をはっきりさせる英語表現の違いを理解すれば、主体的な学びの必要性についての理解も深まることが期待されよう。このように英語で表現することを経験するは、主体性という問題を考えるきっかけになり、自分という存在に対する認識を新たにして、学びの目標を考え直すことにつながっていくと考えられる。英語での会話の経験から、相手との文化的背景の違いについて思いを巡らせるこ

とはハードルが高いと思われるが協同で時間をかけて行うことにより、目標に近づくことは可能であると思われる。

学生のコメント（記述のまま）は「今日はモンゴルの留学生と交流ができました。モンゴルの知識は、前授業で聞いたくらいで後はあまり知らなかったのでたくさんおしえてくれました。でも、私は英語が大の苦手で留学生のはやいスピードにはついていけませんでした。でも大体わかるところもあったので、なんとか大丈夫でした。いつもの授業では、留学生が日本語を話してくれるので、今回はすごく大変でした。日本語では伝えることができても、英語となると思ったように話ができないので、あまり伝えることができませんでした。留学生もがんばって聞いてくれたのでよかったです。途中単語が聞き取れなかったら、紙に単語を書いてくれたので、私たちと頑張ってコミュニケーションをとってくれているんだなと思い、すごくうれしかったです。英語が苦手など言ってられないと思いました。」 グループ活動によって、いつも一緒に日本語で話している留学生に助けられながら、なんとか英語でコミュニケーションを図り、情報を得るということができた様子もうかがえる。また「日本事情」では日本語を使いながら学ぶ場としているので、やはりこのような設定でなければ、日本語教師としては留学生の英語能力あるいは日本語を使わないコミュニケーション能力に関して知ることはなかったという事実もある。

3.1.4. 「ドイツの絵本を使った会話作り」

この回ではドイツの子供対象の異文化理解教育の教材「Nulli＆Priesemut 」を使った活動を試みた。受講学生は誰もドイツ語を理解しないが絵を見て、またグループで話し合うことによって、会話を作成そして各グループで声を出して紙芝居のように演じてもらうことをした。

各グループの発表はどれも作者の意図をつかめており、また漫画に対しての造詣の深い世代ならではの様々なレベルの会話が作成された。最初は戸惑いも見られたが、協力して推測することや、かわいいウサギとカエルのキャラクターがどんな問題に出会いそして解決を図るのかを考えることができたように思う。辞書を引くことなしに、すなわち言葉を介さずに絵によって内容を把握することができることにも最終的に満足を得られたようである。

各グループでの発表後、なぜこのような絵本やこの内容がドイツにおいて子供番組として放映されていることを考えてもらった。ヨーロッパが置かれている現在の状況、経済で統一しなら今まさに様々な文化や価値観を持った人たちが共生する必要があることを、幼児期から教育の中に取り入れていることを理解してもらうことを目的とした。

学生のひとこと感想からは、「最初ドイツ語は理解できないと思った」、「ひとつの絵本から様々な解釈で物語が作れるおもしろさを感じた」、「子供のときに自分もこのような番組を見たかった」といったコメントが得られた。日本と留学生らの国とはちがう、ヨーロッパのドイツ語の素材を使うことによってより広い世界のあることが、そしてまさに共生という同じ問題を持つことが認識されたように思う。

以上の４例は、二つの授業でもそれぞれ実施はできるが、テーマを深く考えるための場ができていること、さらに構成員が様々な国の人が介していることそして何よりも、異文化すなわち価値観が違うことを前提としたインフォメーションギャップを生かした対話がなされていたと言える。

3.2. 最終課題 「日本人への提言」

3.2.1. 作成方法

日本事情Ⅳの最終課題に関しては従来とは違い、以下の流れで実施が可能となった。これまでは、テレビ番組と教師からの情報を元に留学生が１人で原稿を作成していたが今回は 12 月の３週目（16 回中の 10 回目）に日本人学生と留学生の両方に同じ指示を与えて「日本人への提言」作成チームを結成した。留学生１人に対して２-３名の日本人学生が支援するチームである（資料２は指示内容を配布したもの）。

課題は、留学生が A4 用紙１枚程度（発表７分以内）のスピーチ原稿を作成すること、内容は留学生が日本に来てから感じたこと、考えたことから自国との違いを説明する、さらにこのように考えれば、または行動すれば日本人はもっとよくなる、あるいは国際化が進むという提言の形にすることである。日本人学生あるいは社会人にお願いしたいことは、留学生が課題を遂行できるように以下のように段階を踏んで協力することであった。

第一段階：草稿を引き出す・資料の提示
第二段階：日本語アドバイス・発表練習
第三段階：発表会後のコメント（評価）

12 月 15 日にチーム作りを、その後１月 19 日と 26 日にはチームごとの発表練習を、そし

て２月２日には授業内で発表会を行った。すなわち作成のプロセス自体を学習の場に入れ込んだわけである。

3.2.2. テーマと内容

留学生５名と社会人２名によって以下のテーマの発表が作成された（表５）。

表5 最終課題「日本人への提言」

- 「日本人の話し方」(韓国)
- 「日本とﾏﾚｰｼｱの違い-食文化から-」(ﾏﾚｰｼｱ)
- 「アニメから見る日本人」(中国)
- 「野放しの世代格差と大衆個人主義」(日本)
- 「旧暦を知ろう」(中国)
- 「文化による対立と和解」(日本)
- 「家にいつもロボットがあるように」(中国)

⇒講評を書く(内容・話し方について)

3.2.3. 発表会と振り返り

２月２日は７名の発表それぞれに対して、チームから１名の日本人が、各人の発表を聞くポイントを紹介して一人ずつ発表を行った。さらに内容と話し方に関するコメントをシートに記入した。授業後、発表原稿とこのコメントシート 20 枚（各発表に対して 20 名から書かれたもの）を冊子とし、それを使って翌週の９日に振り返りを行った。他者から得た評価をもとにチームごとに振り返りを行い、発表の内容と話し方について書かれたコメントの記述から、改善点を話し合ってもらった。さらに発表のうち聞き手として自分が一番印象深かったもの一つを選んでもらい、合わせてこの結果も発表した（注１）

ここで教師は留学生５名の発表を録音し、通常のスピーチ評価を行った。これに出席点と 20 枚のコメントシートの記述を参考にし、加えた結果を「日本事情Ⅳ」における最終評価とした。

4. 学生らの評価

最終日の２月９日に受講者 20 名に評価のためのアンケートを実施した。質問項目と回答の概要は表６にまとめている（以下日本人学生を学生と表記）。

Ⅰ　今回の授業の中の活動に 12 名が大変よくできた、８名がよくできたと回答している。

＜留学生＞「毎回の授業を通して、日本語をアップできるだけでなく、新しい物事が発見できるからです。」

＜学生＞「最初はいやだったけど、だんだん楽しめるようになって、学ぶものが多かったから。実際参加してみないと楽しいか楽しくないかはわからないと思った。」

Ⅱ　活動を通して考えることが　大変よくできたが 11 名、よくできたが９名であった。

＜留学生＞「できる限り自分を話させることにします。あまり話さないし、自分で書いた文章も短いです。Eye contact もうまくできません。」

＜学生＞「人の意見からその人は何を考えてどうしてこのような事がわかるのか？ということを考えるようになったから。」

＜社会人＞「貴重な発表は高く深みのあるものでした。」

Ⅲ　10 月から学んだことはこれからの生活や学習に使えそうですか？　絶対使える６名、きっと使える 13 名、たぶん使える１名が回答している。

＜留学生＞「就職方向に影響があるかもしれない。国際交流にかかわる仕事がしたくなった。」

＜学生＞自分が何も知らないことを知ったので、これからの生活（学業）で熱心に、また　それらに疑問を持って望むことができると考えたから。」「この授業を受けなければ気づけないちがいに気づくことができたから。」

＜社会人＞「今後の実生活に結びつくように努力する必要があります。」

Ⅳ　この授業であなたは何に気づいた（何を学んだ）と思いますか？

この問いに関しては 20 名全員の回答が得られた。20 名の記述を要約すると、１文化のちがいに気がついた　２価値観の違いは正しいや間違っているではない　３日本人と本当に交流ができた　４言葉で伝える大切さと同時に気持ちも大切なこと　５　グループでの協調性　６一緒に学ぶ楽しさ　７　自分がまだまだ何も知らないことが書かれていた。

Ⅴ　この授業を後輩たちに提供する際に、こうしたらもっとよくなるということを教えてください。19 名からの回答を得た。

概ね今のままでよいとの肯定的な意見が多かったが、「もっとイベント（料理大会や何かを作り上げうような）がやりたかった」、「英語

でのコミュニケーションの場を増やす」「小グループもいいが全体で一つの討議もいいのでは」の意見もあった。

Ⅵ　最後にひとこと（たとえば一番印象に残ったことでもOK）

以下に５名の記述をそのままに挙げる。

＜留学生＞「初めての発表なので、ちょっと難しかったけど、もう一度やりたい。」「自分としては日本に来てから、日本人の学生さんと社会人の方といっしょに受けることが出来たらいいなと思っていました。このように自分が望んでいた授業を受けて本当によかったと思います！」

＜学生＞「たくさんの人と出会えて、一緒に話し合って、協力して、本当に何もかも体験型の授業でほかにはない貴重な授業を受けさせてもらいました。ありがとうございました！」

「振り返ってみると本当に濃い授業だったなと思います。何よりも留学生の人や違う学部・学科の人とつながりが持てたことが嬉しくてしかたありません。相手に伝えたいという気持ちがあれば何でも伝わるものだと思いました。」

＜社会人＞「先生方の意見をおしつけないやり方が学生をのびのびさせると思っていましたので、今回の授業はその意味で成功したと思います。」

表6　受講者による評価（最終アンケート）

数字は回答数

Ⅰ	参加できたか	大変よく-よく　20
Ⅱ	考えることができたか	大変よく-よく　20
Ⅲ	10月からの学びはこれから	絶対-きっと使える20
Ⅳ	何に気づいた（何を学んだ）？自由記述全員回答	
Ⅴ	改善点　19	
Ⅵ	最後にひとこと　19	

これ以外の14名最後のひとことの中には、一緒に受講した人へのねぎらいや感謝のことばが多く書かれていた。

5.　教師の評価と考察

5.1.　「異文化交流の体験から何を学ぶのか」（大橋）

日本人学生への意義をこう考える。この授業は、教養科目として設定したが、シラバスにおいて留学生との交流を取り入れることを明記していたために、授業の成果について、留学生との関わりをあげる学生がほとんどであった。今回授業において行った異文化交流は、人から学ぶことを体験する場としての機能があり、授業で学んだ知識だけではなく、学ぶということの意義や、勉学の方法などに対する新たな気づき、留学生や他の日本人学生との人間関係の構築など、様々な要素が組み合わさった結果として、授業の成果という形で結果が出たものと考えられる。また、主体的な学びの必要性について感じ取ったという意見や、自国の伝統文化などを知るきっかけとなるというような意見もあり、学ぶということの多面的な特色が生まれやすい授業の形式であることも明らかになった。

「我が国の高等教育の将来像」（中教審答申）の中で教養教育や専門教育等の総合的な充実が重点施策として位置付けられている。大学教育の中での教養教育の果たすべき役割を明確にしない限り、教養教育と専門教育の総合的充実という言葉は、教養教育の形骸化につながりかねない要素を内包している。また、教養教育と専門教育の総合的充実の方法については、答申のなかで論じられていない。そのために、この点に関する方策を各大学が模索する中で、方向性を見いだせないままに、掛け声だけが独り歩きをする現実も散見される。近年の専門分野の細分化の流れは、様々な分野に及んでいるが、とりわけ先端分野と言われる理系分野に著しい。このような学門の細分化は、学会の中の研究だけに留まらず、教員が担当する授業内容の専門分化と授業内容の増加という形になって受講生の負担増という結果になっている。これに対して、受講生がどのように取り組んで行くべきかについて、今回の取り組みはある意味において、改革の方向性に対する指針を与える効果を持っている。すなわち今回の異文化交流の体験により、新たな視点の存在に気付いたということを取り上げた振り返りが多く見られた。例えば、これまで当然と考えてきた自身の知識に関して、異文化の相手であるがゆえに明確になる他者からの視点から見たときには、どのように見えるのかということに気が付いて、自身の知識をもう一度考え直す必要性を感じたというような点である。これは、客観的な視点から物事を見る上で、必要となる考え方に類似しており、専門的な勉学においても必要となる考え方である。専門的知識を学ぶ以前に、物事の見方と考え方を身につけておかないと、正しい理解が出来ないだけではなく、考え方を身につ

ける機会も失いかねないという問題がある。このように、異文化に属性を持った他者の存在は、客観的な視点の存在に気付かせる効果があると共に、主体としての自身の役割についても、他者の視点から位置づけが出来るようになることが期待される。教養教育と専門教育の統合的充実のためには、両者に共通する考え方の育成を目指すことが必要である。今回の取組により、異文化交流は主体と客体という関係を身近な問題から気づきを与える効果があることが明らかとなった。今後は専門分野の壁を越えた考え方の共通性に対する気づきを与えるような場を与えることで、さらに充実を図ることが課題と言えよう。

一方で今回の取り組みみにより、多くの学生が授業に対する興味を見出したという点が共通していた。このような勉学に対する興味を引き出すことは、教養教育の一つの目標であるということも言えよう。教養教育の理念・目的について「新しい時代における教養教育のありかたについて」（中教審答申）では「学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることができる能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることが出来る人材を育てる」「自らが今どのような地点に立っているかを見極め、今後どのような目標に向かって進むべきかを考え、目標実現のために主体的に行動していく力」「変化の激しい社会にあって、地球規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力」という見解を出している。そして教養教育は、「個人が生涯にわたって新しい知識を獲得し、それを統合していく力を目指す」としている。このような知的好奇心を呼び起こすためには、学問に対する興味を引き出すことが必要不可欠である。そのためには、学ぶことに対する好奇心を引き出すための場の設定が重要であることも、今回で明確になったと言えよう。また、同答申では「専門分野の枠を越えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養」を教養教育の課題として取り上げている。学生の振り返りから示唆される。今回の成果は、この答申に謳われた教養教育の目標との関連性が高く、今後の改善が必要であるが、ある意味では普遍的な学びの成果というべき性格を持っていると考えられる。このように、この授業の成果は、多くの課題を抱えている大学教育改革の課題に対する方向性に対して、様々な形で有益な示唆を与えると思われる。

教育改革自体の問題点は、日本の様々な教育の場に広がりを見せている。高等教育だけではなく初等中等教育においても、学習指導要領に「生きる力」の育成を目指して、「自ら学び自ら考える」教育への転換が強調されているが、そのような教育目標に向かっての教育改革は容易ではない。事実として、この学習指導要領の中でも、「生きる力」の育成と知識の習得との関連性については、明らかにされていない。「生きる力の教育」を目指して、その具体的な教育改革を進める途上で、学力テストの結果から、知識の不足という問題点が強調されたために、「生きる力の教育」が、知的基盤社会を生きるために必要な「知識・技能」の習得と活用いうように短絡的に結びつけられる結果となった。

グローバル化の時代を迎えて、日本の国自体が国際社会の中での「生きる力」を問われつつある。「生きる力」を、このような問題に置き換えることにより、単なる知識の量と活用というレベルの問題ではなく、主体性の問題であることが明確になってくる。すなわち主体性のない学習者が、知識の活用法を身につけることは不可能であり、単なる学習時間や、発展問題における思考力育成の問題ではない。自らが主体性を持って、授業の中で課題を見つけることができるような場を設定することが、主体性というものを考えるきっかけになり得る。国際関係を持ち出すことで、客体と主体とが対等な立場で相互に入れ替わる場を設定することが可能になる。そのために、国際交流を通じてお互いに学び合うことは、主体と客体の関係性についての気づきを与える絶好の場になり得る。

この授業の名称「異文化交流の体験からな何を学ぶのか」の問に対して 13 名がそれぞれの答えをブログ上に書いた。上述の内容はもちろんそれらを読んだ上での評価と考察である。以下に一人の学生のコメントをそのまま記す。

「ついに最後の授業を迎えました。提言についてはみなさん色々考えることがあったようです。私は○さんと同じグループで、○さんの提言発表の前に『この話をきっ かけに自分の文化のあり方について考え直してほしい。』と紹介しました。今回の感想を見てみると、みなさん初めて聞くことも多かったようで、「日本の文化を改めて考えたい。」という感想が多かったです。日本にいるからこそ気づかない事や、当たり前に思ってることが必ずあると思います。世界に目を向けて、日

本について考 えると、新しい何か発見があると思いました。提言を終えて、留学生の方々は学んだことも多く、社会人の方々は考えたことも多く、聞く側の私たちは、教わることが 多く、収穫の多い活動でした。また、この授業自体も新しい交流に参加できて、良い経験になったと思います。今回この授業に参加したように、自分から挑戦しないと 、チャンスはやってこないし、収穫もありません。これからも自分から意欲的に学びたいと感じました。またこのような授業に参加したいです。」

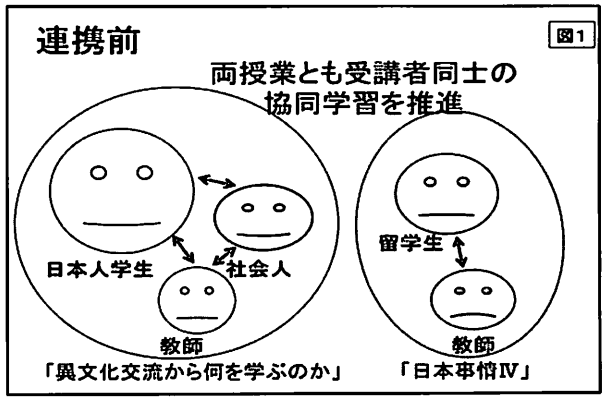
5.2. 「日本事情Ⅳ」(三隅)

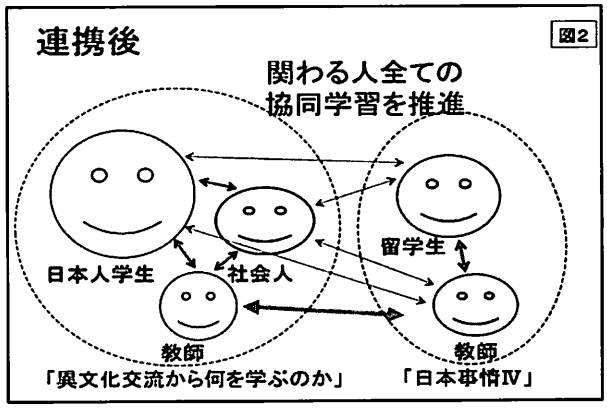
筆者の一人である三隅は、2004 年から共通教育の日本語あるいは日本事情の枠組みの中で「日本人への提言」を作成するプロジェクトワーク型の授業を実施してきた（注２)。がしかし今回はこれまでと違った点がいくつか見られた。それは、これまでに作成された原稿や発表よりも、一人で考えて作成する以上により練られた内容になっていたこと、一方的なものではなく日本人の意見が一度入ったことがわかる内容であった。また最後に教師が訂正することが少なかったこと（ほとんどないものもあった）や、表現に使われたことば遣いが若い世代のものであり、留学生と同世代の日本人のものであったことが確かめられた。これは日本人学生らの留学生に対しての働きかけがうまく行われた結果である。彼らの原稿の中に活かされた日本人学生や社会人のアドバイスに、日本語教師としての狭い枠組みで物事を考えていることにも気づかされた。ここから日本人学生らのことばと思考と、様々な経験を経て今また大学で学ぼうとする社会人の考えも垣間見たように思う。

留学生の感想にも、話し合ったことから調べてそれを発表したり、発表前に何度も日本人学生が練習に付き合ってくれたりしたことから、「これまでの一人で考え作成することより楽しかった」というものもあった。今回は日本語教育からみた考察を別稿に譲り、特に協同学習に関しての評価及び考察を加えたい。

本活動を振り返って一言で言えば、日本語教師と留学生だけではできない活動が実現できたことである。日本人への提言を作成するという最終目標は達成できた。これまでは作成物を日本人学生や社会人に提示するという形であったがそれが、作成の過程で両者に関わってもらえたのである。「視点・論点」という教材の使用が少なくなった代わりに前述の 3.1 の活動で得たものが作成のための情報になっていた、また協同の活動を通して参加者同士の人間関係ができあがっていったように思う。

図１に示したように、連携前にはそれぞれの授業の中で協同学習の取り組みがなされていた。「異文化（略)」では、様々なゲストを迎えまた資料を元に、日本人学生と社会人がペアあるいはグループで話し合い、意見をすり合わせ、またまとめていくといった形である。一方日本事情では、様々な国からの背景の異なる文化を持つ留学生が協同学習をすることを進めてきていた。連携後は図２のようにより複雑な関係の中で活動が行われたが、それぞれの学生に対する評価と責任は各教師が担ったわけである。





学生らの評価をもとに、そして自らの振り返りあらためて、協同学習という視点から特に「日本人への提言」作成の活動を考察する。

ここで、協同学習の基本要素とし Johnson らの考えを確認していきたい。彼らの５要素は次のものである（表７)。

①の肯定的相互依存に関しては、日本人学生と留学生の間で、互いの存在の違いが確認できていた。留学生は自らの意見を出してそれを日本人学生に確認することで自分の意見を確立されるここであった。アイデアを出してもらうわけにはいかなかった。そして日本語に関して日本人学生は母語話者として留学生にない能力を使って助けた。ここには相手に委ねてしまうことなく肯定的な依存関係が成立していた。

表7　協同学習の基本的要素
①肯定的相互依存
②促進的相互交流
③個人の二つの責任
④集団作業スキルの促進
⑤活動の振り返りと改善
←Johnson&Johnsonの定義

②に関しても、発表に向けて両者に積極的な交流がなされていた。授業外での練習や発表前の話し手のポイントを他者に伝える役割、さらに発表後のチームごとの振り返りもうまく行われていた。

③は①とも重なるが、留学生は自分の課題をこなすという責任、そして日本人に協力してもらうこと、すなわち意見を他者にメッセージとして発表できるものとする、日本語を確認するということが日本人の学びをサポートすることにほかならない。自分の学びが他者の学びを必要とすることがここでは確認できた。

④10 月から始めた活動も人間関係ができあがっていくうちに、ペアやグループの形態に慣れてくるのがわかった。最初は教師の半ば強制的な働きかけでグループにしたが、後半では「まだペアやグループになっていな人と組んでみてください」の促しに、互いの顔を見合ってスムーズに作業がなされるようになった。

⑤毎回の振り返り「ひとこと感想」(カード)を貼り付けた１枚紙（B4）をもとに、他者が何を考えていたか自分の取り組みはどうだったかを考える時間を設けていた。最後の時間は、提言チームの振り返りからは他者からのコメントをもとに自らの改善点が出された。そして全体の振り返りからも多くの建設的な意見が出された。

この５つの要素を基準として、この連携が単なるグループ学習でなく協同学習が実践できていたように思う。

授業の中で実施したグループによる活動が全てうまくいったというものではなく、特に最後のグループ活動は協同学習と呼ぶに値するものであったことを確認したい。課題遂行を通して仲間と共に学ぶ楽しさを体験したことも加えたい。

ここで、このような協同学習の場を設定するにあたって強く感じたことは、今回の学習者らに協同を促進するにあたって、一人で授業をしていたときとは違うことに気がついた。それは表７で提示した基本的要素がそのまま、教師同士の協同学習につながることである。

協同学習を実践するために、教師２名は授業の前後に話し合い、互いのアイデアを出し合った。その中で互いの目標とのすり合わせを行い続けた。さらに互いのネットワークを最大限利用することも試みた。どちらかが一方に依存することもなかった。肯定的に相互依存をしながら互いに自律しており、相手の目的が達成できることも自分の責任の中に含まれていた。一緒に活動をつくる中で、互いの異文化差（男女・理系文系・年齢・経歴等、学生に対する価値観、大学という組織に対する価値観の違い）にも気がつきながら、「協同学習を基にした多文化共生を推進する生きる力を持った人材の育成」という共通の目標も確認した。

表8「協働」を進めるために

＜思い込み＞	＜意識改革＞
1)学習は個人の営み	⇒学習は社会的営み
2)個人の成果主義(競争)	⇒協同の精神 自他の学びが共生の学びへ
3)教師は失敗してはならない	⇒失敗は改善につながる

思い込みを確認し、価値観を広げる

両方の授業を成立させるという課題を遂行しながら、かつ協力して授業を行うことのおもしろさと楽しさを味わえたように思う。この楽しさを他の教師と共有して学内で多くの実践が生まれることを望む次第である。

社会人の感想にあったように、二人の教師のこの授業の取り組み、すなわち授業を作る態度や雰囲気が学生らに受け入れられたようにも思う。教師のつながりが（図２の教師の⇔の部分)、池田ら（注３）が言うように「連携」ではなくまた「協同」でもなく「協働」しうる教師に自らがなることが必要なのかもしれない。最後に「協働」を進めるための我々が持つ思い込みからの意識の変容を述べたい。

ここでは三つの思い込みを掲げた。一つ目に学習は社会的な営みであり、個人が学ぶこと以上に他者との対話によって学ぶことが多いことである。そして他者との協同による学びがこれからの社会における問題解決に必要なこと

を我々は体験的に知っていることである。三つ目は、前例のないことや自分の経験にないことを、敢えて取り組んで失敗することの勇気を持つことである。今大学が抱えている現状はこれまでの知見では解決しえないだろう。

そしてこの項の最後に上記の解決のためのヒントを今回の事例から述べたい（注４）。

1） 教師の協働から協同学習を考える。
学生、社会人、留学生、教師といった様々な人との協働を考え、教育観や価値観のすり合わせを試みることから始める。

2） 協同の様々な意味や方法を学ぶ。
教師同士が学び合う機会を作り（FDの最大限の利用）、実践報告や研究成果の共有を促進する。

3） 大学という組織全体と学生からの働きかけを可能にする。
トップダウン（制度の見直しや改革の推進）とボトムアップ（学生と教師の地道な取り組み）の両方から、よりよい教育活動に向けて働きかける仕組みづくりをする。

6. まとめと今後の課題

今回の取り組みは、異文化交流を授業の中で実現するために、留学生向きの授業「日本事情Ⅳ」と「異文化交流の体験から何を学ぶのか」の授業を、原則として合同で行った。本学では、留学生も一般学生と同様に数多く開講されている教養科目や専門科目を選択することは可能である。そのために、留学生が講義室において一般学生と一緒に授業を受ける機会はもちろんある。また、数々のイベントにおいて、日本人学生や地域の社会人と知り合いになる機会も設定されている。しかしながら、留学生の数は日本人の学生数より圧倒的に少ない現状では、数多く開講されている授業科目を、留学生が自由に選択すると、今回のような、日本人学生と留学生が共に学ぶ授業を設定することは難しい。そのために、留学生向けの授業に日本人学生に定員を設けて受け入れるか、または今回のように留学生向けの授業と一般学生向けの授業を連携した合同授業として開設する方法が考えられる。

日本人学生と留学生では、授業での達成目標や評価方法などが異なるために、両者が同一の授業として受講することには、無理があるだろう。また、留学生又は日本人学生がボランティアとして、一般の授業または留学生対象の授業に参加する方法もあり得るが、一定数のボランティア学生やボランティア留学生を確保することは、それなりの困難が伴う。また、単位の出ない授業でも参加したいという留学生や一般学生はモチベーションが高いと期待出来るが、その反面期待していた授業と違うと感じる場合には，途中でリタイアする確率が高くなるという問題が起こる。このような点から、今回の合同授業の形態が、留学生と日本人学生が共に学び合う協同学習をおこなう場として、最もふさわしいと考えられる。

また、連携授業の長所として、留学生と一般学生にそれぞれ異なった到達目標、成績評価法、課外学習の設定などを自由に行うことが出来るという点をあげられよう。今回の授業においても、留学生と一般学生では異なった内容のシラバスを用意して、到達目標や成績評価法などは、両者で全く異なる形で実施した。課外学習の内容も両者で異なった。

日本人学生に対しては英会話に関連したイングレッシュチャットルームや、イングリッシュサポートルームへの参加を促した。また、授業の振り返りをブログへ投稿することを義務付けて、その内容が受講生同士で閲覧できる形にした。このことにより、各授業時間における到達目標を各自で振り返りながら自己管理することを目指した。このような課外学習は、留学生と一般学生に共通に課すことも可能であり、今後の検討課題である。

さらに連携授業の可能性として、異なった専門分野の学生が、それぞれの専門分野の特色を生かしながらコラボレーションを授業の中で実現することが考えられる。例えば、医療系のチーム医療に関わる授業などにおいては、異なった職種の連携の必要性が体験を通じて学び合えるだろう。卒業後の職種によりお互いの連携が必要となる専門分野の授業では、それぞれの授業を単独で行うよりも、連携授業を実施してその中で協同学習を実現する工夫が求められる。

また、同じ専門分野であっても、対象学年の異なる授業同士が連携して協同学習をする授業を計画することも可能である。上級生は下級生をリードする役割を課すことにより、自らの学びに対するモチベーションを高める効果が期待出来る。また、下級生は、上級生の姿を見ながら学ぶことが出来るために、自らの経験で学習の到達目標を知ることにつながっていく。

さらに、専門分野の異なる複数の授業が連携して、様々なテーマを設けて、その課題を解決

するためにプロジェクトをつくるような授業も、今後の社会で活躍出来る人材を育成するためには、欠かすことが出来ないと考えられる。

新しい発想をするためには、異なった視点から物事を見ることや、その考え方を柔軟に取り扱って新しいアイデアを出すことが出来るような人材構成にする必要があるためである。このような新しい時代に対応できる人材を育成するという目的を我々教員がまず確認すること、そして大学教育の中で実現すべく改革を進めていくことが、大学教育改革に求められていることだろう。今後の FD 活動として積極的に推進していく必要があると考える。

注1. 20 名が 1 番印象深かったとしたのは社会人が発表した「野放しの世代格差と体臭個人主義」で 9 票、あとの 6 発表は 1 から 3 票を得た。社会人の若者へのメッセージは内容的にも話し方もインパクトがあり、聞き手に響くものであった。これも大学の授業へ参加したいという意欲を持った社会人ゆえのことで、日本人学生及び留学生へも大きな刺激となったようであった。

注2. 拙稿「日本人への提言が問いかけるもの -NHK 視点・論点を教材とした日本語学習（2005）-」において、上級日本語の教材としてテレビ番組を使うこと、最終プロダクツである「日本人への提言」を冊子あるいは発表の形で広く社会に提示しその評価を学習者に還元することを目的としたプロジェクトワークを実施している。また拙稿「美術作品を通した学習の可能性（2011）」では、同じく「視点・論点」を教材としながらも、人前で発表するという美術館での活動をプレタスクとして位置づけた報告をした。今回の活動でも提言作成の過程で日本人が参加する形のプロジェクトワークが実施できた。これに関しては 2012 年前期及び後期の実施内容を基に記述する予定である。

注3. 池田ら（2007）は、連携、協同、協働を定義している。端的に言うと「連携」は両者の関わりが成立していること、「協同」はどちらかといえば教室や教育の枠組みの中での協力関係やスキルを指す。それに対して「協働」は「トップダウンだった制度や仕組みが対等な関係性を前提とするものへ変化してきた姿」でありさらに「違いを受け入れ理解し統合していく考え方の転換」であるとしている。「協働」がこれからの社会に新しく必要とされるものを生み出すとしている。（参考文献 P.16）

注4. 本論考の内容は 2011 年後期のデータに限ったものである。この連携による取り組みはさらに 2012 年の前期及び後期にも改善を加えて実施した。続編に当たる論考を次に準備している。受講者の軌跡を辿りながら、日本人学生のコミュニケーション能力を養成するという視点から、または注 3 に書いたように留学生の日本語教育の視点から等、改めて分析考察を進める予定である。

参考文献：

池田玲子・舘岡洋子（2007）「ピア・ラーニング-創造的な学びのデザインのために-」ひつじ書房

上田 薫（1975）「人間のための教育」国土新書

石田裕久他訳（2010）「学習の輪-学び合いの協同教育入門-」ニ瓶社

武田忠（2008）「『生きる力』を育む授業　いま、教育改革に問われるもの」　新曜社

中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」平成 20 年 1 月

鄭 愛軍・大橋 眞（2011）「実例による異文化コミュニケーションの問題分析-青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に」大学教育研究ジャーナル，8, 69-75.

鄭 愛軍・大橋 眞（2012）「青島理工大学と徳島大学との遠距離ビデオ会議（SKYPETM）交流の実例分析-2011 年 4 月から 7 月までの交流内容を中心に-」大学教育研究ジャーナル 9 74-80

中戸 義礼（2001）「創造性を育てる学習法」大学教育出版

質の高い大学教育改革プログラム（2011）「地域社会人を活用した教養教育」2011 年報告書「水曜学舎」Archives of Regional Science Vol.1-3:4-75、

安永悟（2006）「実践・LTD 話し合い学習法」ナカニシヤ出版

安永悟（2012）「活動性を高める授業作り-協同学習のすすめ-」医学書院

George M.Jacobs,Michael A.Power,Loh Wan Inn 著伏野久美子他訳（2005）

「教師のためのｱｲﾃﾞｱﾌﾞｯｸ-協同学習の基本原則とﾃｸﾆｯｸ」 日本協同教育学会
Gehrtz 三隅友子、山田久美子（2005）『日本人への提言が問いかけるもの-NHK視点論点を教材とした日本語学習』徳島大学留学生センター紀要第１号 p.37-59
Gehrtz 三隅友子、竹内利夫（2011）『美術作品を通した学習の可能性』徳島大学国際センター紀要第６号 p.20-30
Gehrtz 三隅友子、生駒佳也（2012）『地域の国際化を目指す高大連携の可能性-交流活動のもたらすもの-』徳島大学国際センター紀要第７号 p.25-32
Johnson.D.W.,Johnson.R.T&Houlubec, E.J 著 杉江修治他訳（1998）「学習の輪-アメリカの協同学習入門-」
Johnson.D.W.,Johnson.R.T&Smith.K.A 著，関田一彦他訳（2001）「学生参加型の大学授業-協同学習への実践ガイド-」
Noel Entwistle 著 山口栄一訳（2010）「学生の理解を重視する大学授業」玉川大学出版部

付記：
本論考は、日本協同教育学会第９回全国大会にての発表「交流と対話を通した学内の協同・連携を考える」(2012 年 9 月 22 日於日本歯科大学、発表者、Gehrtz-三隅友子・大橋眞）と、大学教育カンファレンス in 徳島でのラウンドテーブル「学生が主体的に取り組む教育活動を目指して-プロジェクトワーク型の活動のすすめ-」(2012 年 12 月 26 日於徳島大学、発表者、大橋眞、坂田浩、Gehrtz 三隅友子）を本紀要のために新たに書き直したものである。

資料１　「異文化交流から何を学ぶのか」・「日本事情Ⅳ」　実施内容　　2011 年後期

概要：留学生は最終課題として「日本人への提言」という題名で各自テーマを決めて発表する。
日本人学生は、留学生の原稿作成及び発表を支援し、最終的にはテーマに対するレポートを作成する。

回	月日	内容	備考
1	10/6	自己紹介	教材及び授業方法の紹介
2	10/13	モンゴル訪問研修報告 ・美術館課外活動の紹介	日本人学生による報告（高校 4 年生でいいの？）
3	10/20	「アニメについて」スピーチ （徳島県外国人弁論大会７月優勝者）	前期留学生のビデオ　話の内容と話し方を確認
4	10/27	休講　（三隅ベトナム・大橋韓国出張）	
5	11/10	三隅・大橋　出張報告 （ベトナム・スウェーデン）	大学の用務及び個人的体験を話す
★	11/12	課外活動　作品制作　徳島県立近代美術館	希望参加者のみ　留学生と日本人学生
6	11/17	「各国の挨拶」「日本語の挨拶」「さようならの語源」	討論　グループごとの発表
7	11/24	「ドイツの絵本から」 ①グループで会話作成	多文化理解
8	12/3	「ドイツの絵本から」 ②「南京大学について」張先生	グループ発表・留学生が通訳
9	12/8	韓国「珍島学会」報告（大橋）	韓国のイメージについて話し合う
10	12/15	「日本人への提言作成」チーム結成	後半の課題に向けて
11	12/22	ソロモン諸島とバヌアツの生活	異文化理解
12	1/12	モンゴル・タイ・米の学生との英語による交流セッション	モンゴル４名、アメリカ、タイ各１名
13	1/19	発表準備　「津波てんでんこ」 NHK 視点論点より	日本人学生の支援によってテーマを絞る
14	1/26	発表練習	グループごとに（社会人２名にも依頼）
15	2/2	「日本人への提言」発表会	社会人を含め７名　感想の記入
16	2/9	振り返りとまとめ 「日本人への提言」冊子の配布	評価活動（この授業全体の評価）

資料2　2011年12月に配布した「日本人への提言」　作成資料

日本事情Ⅳ　「日本人への提言」作成プロジェクト　メモ

国際センター　Gehrtz 三隅友子
misumi@isc.tokushima-u.ac.jp

1. 留学生がA4　1枚～2枚まで原稿　（発表7分くらい）を作成する。

   2月に発表会を実施。木曜日の3.4校時　日程は未定

2. 内容は、留学生が日本に来て感じたこと、考えたこと、思ったことから

   自分の国とは違うことを説明する

   さらに、このような考え方または行動をとれば　日本人はもっとよくなる！

   国際化が進む　という提言に結び付ける

   → こんなものはどうだろうかの

   質問を受け付けます！！自由に

3. 日本人のみなさんにお願いしたいこと！

   留学生が課題を遂行できるように助けてください！

   ＜第一段階＞
   1　内容のアイデア　話し合いによって　今感じていることを
   2　どうしてそんな風に思うのかを　聞いてください
   3　文章を作る際の　資料などをさがす
   　　リソース（物的・人的・社会的）の提供や情報提供
   ＜第二段階＞
   4　文章作成に関して　わかりにくい日本語のアドバイス
   5　作成原稿の発表練習

   ＜第三段階＞　発表会後
   6　作成原稿に関してのコメント

   チームで支援をお願いします。

12月15日は　①チームつくり

②留学生が今日感じていることや疑問に思っていることを出してみる

「日本事情（木曜日）」の方の授業の柱です。